

清宮質文

《夕暮の裏門》

清

宮質文によるガラス絵五点を福原義春氏からご寄贈いただきました（水彩を用いたコラーージュ作品一点もあわせての受贈です）。すでに当館は版画作品九点を所蔵していましたが、清宮は創作活動を本格化させた一九五〇年代からその晩年まで、木版画と並行してガラス絵を制作していましたから、ガラス絵の収蔵は宿願でした。

ガラス絵の魅力は、色の透明感にあります。透明な厚みのある物質の向こう側に色が重なるガラス絵では、絵の表面のテクスチャーはほとんど感じられません。その結果、イメージから物質感が除去されて——この言い方が科学的に正しいかどうかはさておき——色が光のように透明に感じられるわけです。

清宮の《夕暮の裏門》を見てみましょう。グレーの扉、青の扉、黒い屋根を持つ赤い建物、その奥に見える濃い青の、こちらもおそらくは建物。そして空に浮かぶ白い月。淡い色同士による、対比というよりは推移と言いたくなる関係性が見事です。月のまわりがむしろ色濃くなっているのめさずがです。

ところで、今は説明のために、扉、扉、建物、とそれぞれの事物がなんであるかを明記しましたが、実際にはそれぞれが、むしろ色の塊として感じられるのではないのでしょうか。たとえば赤い建物。「出角」を

表現する縦の線がありませんし、屋根と壁の境界線も結構ラフです。見ているうちに段々と、「建物」という意味が曖昧になり色の塊になっていくような気がしてきます。そしてその塊の輪郭すらも溶けていくような気が……。

ガラス絵で輪郭線を描くことはもちろんできます。エッチングで使うような針を使えば、色を塗った後に削るようにして描くこともできます。でも清宮はそうしなかった。この事実から、彼はガラス絵において色を輪郭から解き放つことに関心があつたと推測できます。そして、様々な事物の輪郭線が溶けるのは、「誰を彼(黄昏)」の時空の中でなければならなかったのでは。

この絵に描かれている人は誰でしょう。裏門の向こうの敷地がなんなのか、またこの人が門の内外どちらに向かっているのかで「意味」は変わってくるでしょう。しかし、そもそもこの人には影がないのです。少し前に制作された版画作品の《街外れ》(木版画集『暗い夕日』の第八葉)において、人に影があるものとないういうヴァリエーションをつくっている清宮ですから、「影のない人」の表現は意図的なはず。この絵は、見れば見るほど、形だけでなく様々な意味も輪郭を失っていきます。そして相関するようにして、おぼろげな感情が空間に滲みだしていくのです。

(美術課主任研究員 保坂健二期)

清宮質文(1917-1991)
《夕暮の裏門》

1975年
ガラス絵
10.9×16.2cm
平成28年度寄贈